兼好と白楽天の病気観・健康観について

金　文峰

はじめに

『徒然草』[1]第十三段には次のような記述がある。

ひとり灯の下にて文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。

文は文選のあはれなる巻々、白氏の文集、老子の言葉、南華の篇。此国の博士どもの書ける物も、いにしへのはあはれなること多かり。

ここで兼好は「文」の代表として『文選』、『白氏文集』、『老子』、『荘子』の四つの書物を取り出している。兼好がこれらの古典をひもとくことによって、古の聖賢を師とし、友とし、親しく語り合うことができたということであろう。

この四書の中の『白氏文集』については、戸谷三都江氏の「『徒然草』の方法―『白氏文集』受容における」[2]という論文があって、『徒然草』第七段の四十歳を老と若の境とする見方が『白氏文集』の受容と考えられるのではないかと述べておられる一章がある。

私もかつて、兼好の老醜観・名利観が『白氏文集』の影響を受けたのではないかということについて考察したことがあるが、今回は兼好の病気観・健康観と『白氏文集』はどういう関係があるかについて考察を進めていきたいと思う。

一

『徒然草』には病や薬、医師や医療についての段が多くあり、これらの記事を通じて兼好の健康状態を窺うことができる。島津久悲氏は「兼好の健康」[3]という論文において、病気や薬、医術や医療などについての段をあげ、兼好は恐らく頑健な身体の持ち主ではなく、病弱な身であっただろうと推測されている。また、稲田利徳氏も「兼好の顔」[4]と題された論文で、島津氏の論文に賛意を示しておられる。これらの論文の指摘を踏まえて、改めて『徒然草』に現れている病や薬、医師、医療などについての段を概観していきたいと思う。

まず『徒然草』第百十七段を見てみよう。

友とするに悪き物、七あり。一には、高くやむごとなき人。二には、若き人。三に、病なく身強き人。四には、酒を好む人。五には、猛く勇める兵。六には、空言する人。七には、欲深き人。

良き友、三あり。一には、物くるゝ友。二には医師。三には、智恵ある友。

ここで、「友とするに悪き物」の中で三つ目に「病なく身強き人」をあげている。「病なく身強き人」は多くの注釈書で、健康な人は病気の経験がないため人の病気の苦しみを知らないから「良き友」にならないと指摘されている。また「良き友」の中で二つ目に「医師」を挙げている。『徒然草』には他に百三段の「医師忠守」と百三十六段の「医師篤成」の挿話が興味をひく。百三段は医師忠守が侍従大納言公明になぞなぞにされて「唐瓶子」と解かれて一座の人々に笑われたのに立腹して退出してしまった話である。百三十六段は医師篤成が六条有房の「『しほ』といふ文字は、いづれの偏にか侍らむ」との問いに誤り答えて、嘲笑された失敗譚を記したものである。これについては山田俊雄氏「しほといふ文字は何れの偏にか侍らん」[5]という論文を参照されたい。百三段、百三十六段、ともに宮廷に仕える医師が周りの人々からからかわれることを記した段である。この二段から兼好の医師に対する見方を明確に窺うことは難しいが、兼好が普段から医師に対して関心をもっていたと評することは許されるだろう。

では、医術に対して兼好はどのような見方を示していたのか。第百二十二段は人間として身につけるべき才能について語った段である。

人の才能は、文明らかにして、聖の教へを知れるを第一とす。次には、手書く事、むねとすることはなくとも、これを習ふべし。学問に便りあらんためなり。次に、医術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝の勤めも、医にあらずはあるべからず。次に、弓射、馬乗る事、六芸に出せり。必ず是を窺ふべし。

このように人の身につけるべき教養の中に「医術」をあげ、その意義を説いている。

薬に対しても兼好は人一倍関心を持っていたように思われる。百二十段に「唐物は、薬の他は、皆無くとも事欠くまじ。」を書き出しにして、薬を除く舶来品不要論を展開している。この段には兼好の合理的なものの見方がよく窺われるか、「得がたき宝を尊まず」と言いながら薬だけは例外だと言っていることからも、自分自身の健康管理に非常に熱心であったことが分かる。また百二十三段でも人間生活の基本的な条件を述べる時に衣食住をあげたあとで、

但、人皆病あり。病に侵されぬれば、その愁へ、忍びがたし。医療を忘るべからず。薬を加へて、四のこと、求めえざるを貧しとす。

と語っている。薬に対しても常に注意を払っていたことが窺われる。

以上の例はいづれも「医療を忘るべからず」、「医術を習ふべし」と語っている兼好が確かに自身それらに深い関心を持って、注意を払っていたことを証するであろう。兼好は自分の病気のことについては一言も書いてはいないが、恐らく頑健な体の持ち主ではなく、病弱な身であっただろうと推測できるのである。

二

ここまで見てきたように、兼好は医学や薬などについて非常に深い興味を示していたが、その一方で、人間は結局病を受けて死ぬのが通常であるということに目覚めていたようである。そして人間をその病気の苦しみから根本的に救ってくれるのは仏道しかないと信じていた。

第四十九段は無常迅速を自覚すべきことを述べた段である。

老来たりて、始めて道を行ぜむと待つことなかれ。古き塚は、多くこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて、たちまちに此世を去らむとする時にこそ、初めて過ぬる方の誤れることは知らるれ。

ここで兼好は、世の中は無常であり、生あるものすべては死を免れることはできないという自覚を示している。そして人間が病気の苦しみを乗り越え、無常を超克するためには仏道に入ることが望ましいと言っている。

また、第二百四十一段は、万事放下して、仏道に向かうことを勧めた段である。

病の重るも、住する暇なくして死期すでに近し。されども、いまだ病急ならず、死に赴かざるほどは、常住平生の念にならひて、生の中に多くのことを成じて後、閑かに道を修せむと思ふほどに、病を受けて死門に臨む時、所願一事も成ぜず。

ここでも、病気が重くなって死期が近付いてからでは、悟りを求めなかったことを後悔しても仕方がないので、所願を捨てて仏道に精進せよと述べている。

また、第百十二段は、世事をすべて放棄せよとの論である。

明日遠き国へ赴くべしと聞かむ人に、心閑かになすべからむわざをば、人、言ひ掛けてんや。俄かの大事をも営み、切に嘆くこともある人は、他の事を聞き入れず、人の憂へ悦びをも問はず。問はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやう〳〵闌け、病にもまつはれ、いはむや、世をも遁れたらむ人、又これに同じかるべし。…日暮れ、道遠し。吾生すでに蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。

ここでは「明日遠き国へ赴く」人、「俄かの大事を営み、切に嘆くこともある人」は心閑かになるはずがなく、「他のことを聞き入れず、人の憂へ悦びをも問は」ない。そうならば「年もやうく闌け、病にもまつはれ、いはむや、世をも遁れたらむ人」は「ま

た、これに同じかるべし」と言っている。人間生活におけるしきたりはどれも避けられないもので、「一生は雑事の小節にまつはれ」ないで、「諸縁を放下すべき時なり」と断じている。

このように見てくると、兼好はこの世の中は無常であり、人間も例外ではないし、人は生れて死ぬのが常であるということについて明確に自覚し、体得していたようである。そして、病の苦しみを乗り越えられる道はただ仏道しかない、病気になって道を修しようと思ったら遅いので、若い時から仏道に精進するようにと語っている。

三

それでは、白楽天は「病」をどうとらえていたかを、『白氏文集』[6]の詩を中心に考察していきたい。白楽天は「十代後半から七十代前半にかけて、七十六首もの詠病詩を創作している[7]」と言われている。その代表的なものを取り上げ、年齢、官職、詠作の場所、病気について整理したものが次表である。この表は以下の先学の論文を参考にして作ったものである。

今井　清「白楽天の健康状態」（『東方学報』昭和三十九年十月）

丹羽博之「白楽天の病状」

（『大手前女子大学論集』二十五巻　平成三年十二月）

下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社　平成八年）

年齢	官職	場所	詠病詩
39	京兆戸曹参軍・翰林学士	下邽	旬月来多乞　假中稍閑。（「和答詩十首。并序」0100）
40	〃	〃	書魔昏両眼。酒病況四肢。（「白髪」0424）
	〃	〃	前歳二毛生。今年一齒落。（「自覚二首」0083）
43	〃	〃	漠漠病眼花　星星愁鬢雪。（「別行簡」0462）
44	太子左賛善大夫	長安	羶腥斷来無氣力。風痰惱得少心情。（「病中早春」0829）
	江州司馬	長→江	眼痛減盃酒　坐。逆風吹浪打船聲。（「舟中讀元九詩」0883）
46	〃	江州	病肺慙燈猶閣。衰顔忌鏡明。（「潯陽歳暮。寄元八郎中庾三十三員外」1010）
47	〃	〃	鬢髪若浪牙齒蹶。不覚身年四十七。（「浩歌行」0580）
47～48	〃	〃	肺病不飲酒。眼昏不讀書。（「閑居」0326）
49	忠州刺史	忠州	両眼日将闇。四支漸衰瘦。（「不二門」0545）
51	杭州刺史	杭州	腑傷雖怕酒。心健尚誇詩。（「對酒自勉」1329）

53	杭州刺史	杭州	二毛晓落梳頭懶。両眼春昏點藥頻。（「自歎二首」1396）
〃	〃	〃	氣嗽因寒發。風痰欲雨生。（「病中書事」2339）
55	蘇州刺史	蘇州	春来痰氣動。老来嗽聲深。眼暗猶操筆。（「自歎」2456）
	〃	〃	足傷遭馬墜。腰重倩人攙。（「馬墜強出。贈同座」2459）
	〃	〃	眼臓損傷来已久。病根牢固去應難。（「眼病二首」の「又一首」2478）
58	刑部侍郎	長安	肺傷妨飲酒。眼痛忌看花。（「和劉郎中曲江春望見示」2647）
58～59	太子賓客東都分司	洛陽	獨有病眼花。春風吹不落。（「落花」2240）
59	太子賓客分司	〃	齒傷朝水冷。貌苦夜霜殺。（「不如来飲酒七首」2763）
60	河南尹	〃	頭風目眩乗衰老。秪有增加豈有瀉。（「病眼花」2871）
64	太子賓客分司	〃	去冬病痢瘠。將養遵醫術。（「二月一日作。贈韋七庶子」3015）
65	太子少傅分司	〃	頭痛牙疼三日臥。妻看煎藥婢来扶。（「病中贈南鄰覓酒」3279）
68	〃	洛陽	開城已未歳。余蒲柳之年。六十有八。冬十月甲寅旦。始得風痺之疾。澄寥目眩。左足不支。（「病中詩十五首。并序」3408）
70～73	晚年致仕退休時代		脚瘡春斷酒。那得有心情。（「病瘡」3618）

この一覧表を見てくると、彼が病んでいたのは、眼病、肺病、歯の病気、痰の多いことから考えて気管支病、中風のようである。これらは持病とも言えるほど白楽天を一生苦しめていたように思われる。このような病状からみて丹羽博之氏は「白楽天の病状」[8]で、白楽天が患っていたのは現代にいう「糖尿病」ではないかという論を出されている。

ここで、白楽天の官歴について[9]概観してみる。白楽天は三十二歳の時、親友元稹らと書判抜萃科に及第して秘書省校書郎（正九品上）を授かっている。秘書省は宮中の貴重な典籍を管理する役所であり、校書郎はその書庫にある典籍類の広い意味での校訂作業に任ずる官職である。三十五歳の時、才識兼茂明於体用科に登第して盩厔県の県尉（正九品下）に任命される。この職務は県の長官たる令を補佐して県政の事務一般を総括し、租税の徴収にも当たるものである。三十六歳の時は京兆府の府試の考官、翰林学士を命じられるが、いずれも兼務である。翰林院は天子に直属する、天子の私的な諮問機関である。三十七歳の時に、左拾遺に任命される。拾遺は従八品の低い官ではあるが、天子側近の勅授官である。諷喩詩はほとんどこの時期に制作された。三十九歳の

時、京兆府戸曹参軍を授かり、翰林学士はそのまま続けた。京兆府戸曹参軍を授かり、翰林学士はそのまま続けた。京兆府戸曹参軍は正七品下で、民戸のことをいろいろ取り扱う属官であるが、翰林学士でもあるので禁中に宿直するようなこともあったものと見られる。四十歳の時、母の死により官を罷めて下邽に行って三年間の喪に服することになる。この時期は白楽天の生涯において詠病詩が一番多く詠まれた期間でもあった。都へ呼ばれることなく、憂鬱な日々を送っていたのであるが、加齢も加わって、しだいに自分自身の健康状態にも目を向けるようになり、病気にも敏感になったものと推察される。四十三歳の時、太子左賛善大夫を授かり入朝する。官品は正五品上へと高くなったが、仕事そのものは皇太子のお守り役という閑職である。四十四歳の時、江州司馬に貶謫される。官品は従五品下で、刺史の次官的任務についていたようである。次いで忠州刺史となり、正四品下へと高くなる。そして杭州刺史、蘇州刺史という地方官に任ぜられている。いずれも四十代から五十代にかけてのことである。このように見てくると、白楽天が一番活躍していたのは三十代の都にいる時だったようである。表からもわかるように、彼が病気を多発させた時期は、四十代以後である。また、都の長安にいるときは比較的に少なく、下邽、江州、忠州、杭州、蘇州、洛陽と言った地方に在住した時期に集中している。これについて埋田重夫氏は「典型的な北方育ちである彼の体質にとって、江南地方の気候・風土は、概して好ましい影響を与えなかったと考えられる」[10]と述べられている。

冒頭にふれた戸谷三都江氏の論文が考察されるように、白楽天は四十歳を人生の老と若の境としていた。白楽天が地方官に任ぜられていた時期は四十代から五十代で、もう初老は過ぎ、老年という自覚が十分にあったものと想像される。加齢とともに自分自身の健康状態や病気の関心が深まるのは人間の常である。加えて地方の風土に対する違和感もあった。さらに校書郎をはじめ、翰林学士、左拾遺といった天子側近の勅授官に任ぜられていた三十代に比して、四十代、五十代は江州司馬に貶謫されたのをはじめ、大州とは言っても、杭州刺史、蘇州刺史など地方官を勤めた時期が長く、中央の官界での華々しい活躍からは縁遠い存在であったと言ってよい。順風満帆とは言いがたいこのような官歴も詩人に病気への関心を強め、詠病詩の多作を促した要因になっていたのではないだろうか。

四

ところが、さまざまな病気に苦しめられていながらも、白楽天は七十五歳まで長生きしている。次に彼はどういうふうに病に対処していたかを考察してみたいと思う。

まずは精神的養生法が考えられる。つまり心の持ち方によって肉体の病気の苦しみを乗り越えようとする態度である。「永崇里観居」（0179）で「楽天心不憂」と詠んでいるが、これは『周

易』の「繫辞上」の「天を楽しみ命を知る、故に憂えず」の語を踏まえ、これこそ「楽天」の字のもとずく所であると言われている。[11] このように彼は楽天的に生きていこうとし、病気に苦しめられている時も「心」を大事にしていたのである。そのような彼の態度は次に掲げた詩句[12]からも窺われる。

①閑談勝服薬。稍覚有心情。（「病中有人相訪」0482）

（閑談は薬を服するに勝れり、稍心情有るを覚ゆ。）

②身作醫王心是薬。不労和扁到門前。（「病中五絶」3414）

（身は醫王と作りて心は是れ薬、労せず和扁門前に到るを。）

③不須憂老病。心是自醫王。（「齋居偶作」3657）

（老病を憂ふるを須ひず、心は是れ自ら醫王。）

①は下邦で憂鬱な日々を過ごしている詩人にとって、友人との閑談は薬を飲むよりも効能があると言い、②の「和扁」は、醫和と扁鵲、古の名医で、ここでは身の動作が医者の働き、心は薬の働きをなしていて、医者の来診を乞うまでもないと言っている。③も心が医者であるので老病を心配する必要がないという意味であろう。これは、心の持ち方で病に勝とうとする態度を示す一方、薬や医師に対しての不信感が表されているとも理解できる。薬については自らいろいろな処方を試みたりもするが、あまり効果がみられず、あきらめざるを得なかったのである。次の詩ではそのような気持ちを詠んでいる。

豈是藥無効。病多離盡蠲。（「雨夜有念」0485）

（豈に是れ薬効無からんや、病多くして盡く蠲き離し。）

千藥萬方治不得。唯應閉目学頭陁。（「眼暗」0780）

（千藥萬方治し得ず、唯應に目を閉じて頭陁を学ぶべし。）

「眼暗」の「頭陁」は仏教を指しているが、薬や医師も役に立たないので、仏教を信じた方がいいということであろう。

白楽天が「佛教に入るのは三十九歳からである」[13]といわれるが、彼はまた病の苦しみを仏道に入ることによって払いのけようとしていたと思われる。

「不二門」（0545）は元和十五年四十九歳、忠州刺史の時に詠んだ詩であるが、ここにその一部をあげる。

坐看老病逼、須得醫王救。

坐看に看る老病の逼るを、須く醫王の救を得べし。

唯有不二門、其間無夭壽。唯不二門有り、其間夭壽無し。

ここでの「醫王」は仏、「不二門」は有無真俗等の差別を越えた教え、すなわち仏教を指している。[14] 両眼がだんだん見えなくなり、手足もやせ衰え、昔の壮志も健康もいつしか衰え、宮中の私の名簿は、今もこぼれ落ちたまま。仙薬を作る試みも失敗に終わり、憔悴した老人として避遠の地にいるが、この老いと病の身を救うのは仏教しかないと詠んでいる。

これ以外にも白楽天には老病を詠んだ詩がたくさんあるが、その老病に対処するものとして彼は仏教の空の教えを尊重した。[15] それは、

「罷灸」（3417）という詩からも窺うことができる。これは開成四年、六十八歳の時、洛陽で詠んだ詩である。

病身佛説將何喩。　病身佛説將何にか喩ふる、
變滅須臾豈不聞。　變滅須臾豈聞かざらんや。
莫道淨名知我笑。　淨名をして我を知りて笑はしむる莫けん、
休將火艾灸浮雲。　火艾を將て浮雲に灸するを休む。

「淨名」は菩薩の名、維摩詰、「火艾」はもぐさをさしている。仏説では病身を浮雲の如くほんのわずかの瞬間に変滅するものだと言っている。されば、維摩詰に笑われまいと思って、もぐさを以て浮雲の如き身に灸を焼くことを罷めたと詠んでいる。

また、仏道修行の一環として斎戒もやっている。斎戒のとき、彼は精神修養だけではなく、酒や魚などにも手を出さない。彼は十五年乃至二十年来、世俗の楽しみを犠牲にしてきた。長斎は一ヶ月で、長斎以外の月でも十日間は斎戒を行っていた。[16] ところが、斎戒の期間が終わるや否や、ただちに酒や魚などに手を出し、実行しやすい夏だけ斎戒をやっていた。「仲夏斎戒月」（0371）は詩人が五十三歳の時の作であるが、仲夏の一ヶ月、仏教徒としての斎戒を行っていることを詠んだ詩である。

仲夏斎戒月、三旬斷腥羶。　仲夏斎戒の月、三旬腥羶を断つ。
自覚心骨爽、行起身翩翩。　自ら覚ゆ心骨の爽なるを、行起するに身翩翩たり。

一ヶ月間斎戒をやり、健康を保つ上で非常に役に立っていたことを窺うことができる。

このように、白楽天は心の持ち方を以って病に立ち向かおうとし、また仏道修行を以って病の苦しみを乗り越えようとしていたのである。

その一方で酒を飲むことによって、病気の苦しみを忘れようとする一面も白楽天にはあった。酒に対する白楽天の嗜好というものははなはだしく、晩年には飲酒が原因で中風にかかる。しかし、埋田氏も前掲論文[17]で触れられているように、詩人白楽天にとって酒は必ずしもマイナスにのみ作用するものではなかったようである。彼が酒を愛した背景には、単純な陶酔、飲楽という側面のほかに、養生（体力増進）、遣興（ストレス発散）という積極的な部分があったと思われる。

「六年春。贈分司東都諸公」（2244）は大和六年に洛陽で詠んだ詩である。そこでは、

毎因同醉樂、自覚忘衰疾。　毎に醉楽を同じうするに因り、自ら衰疾を忘るるを覚ゆ。
始悟肘後方、不如杯中物。　始めて悟る肘後方、杯中の物に如かざるを。

と詠んでいる。「肘後方」は医書の名前であるから、医書を読むよりも酒を飲むほうがましだと言っている。前にも挙げた「豈是

薬無効。病多難盡醫」、「千藥萬方治不得。唯應閉目学頭陁」などの詩句に説かれている薬の効能が見られないのも、彼の飲酒の習慣と関係ないとは言えないだろう。また、宝歴二年、詩人五十五歳の時、眼を病んで百日の暇を請うということがあった。その時詠んだ「眼病二首」の「又一首」（２４７８）にも、

醫師盡勸先停酒　醫師は盡く先づ酒を停めんことを勸め、
道侶多教早罷官　道侶は多く早く官を罷めんことを教ふ。

とあるように、医者からも何回も酒をやめるように言われたようである。しかしながら一向にやめず、逆に親友に飲酒を勧める詩もかなりある。たとえば、「勸酒寄元九」（０４１６）では酒のことを、「俗號銷憂藥。神速無以加。（俗に銷憂藥と號す、神速以て加ふる無し）」と詠んでいる。今井氏[18]が言われているように、白楽天にとって酒は正に「百薬の長」である。

一方兼好はどうであろうか。上にあげた百十七段で「友とするに悪き物」の中で四つ目に「酒を好む人」を挙げている。「病なく身強き人」と並んで、酒を好む人も友とするのに悪いと言っていることから兼好はあまり酒の好きなタイプではなかったとも言えるだろう。第百七十五段は酒の弊害と徳について語った段である。酒を飲んだ人の醜い酔態を次のように描き出している。

人の上にて見たる、ことに心憂し。思ひ入れたるさまに、心にくしと見し人も、思ふところなく笑ひの、しり、言葉多く、烏帽子ゆがみ、紐外し、脛高くかゝげて、用意なきけしき、日頃の人とも覚えず。女は、額髪はれらかに掻きやり、まばゆからず顔うちさゝげてうち笑ひ、盃持てる手に取り付き、よからぬ人は、肴取りて口にさし当て、みづからも食ひたる、さま悪し。声の限り出してをの〳〵歌ひ舞ひ、年老たる法師召し出されて、黒く汚き身を肩脱ぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ疎ましく、憎し。

兼好の非常に冷静な視線を感ずるが、その結論として彼は「百薬の頂とはいへど、よろづの病は酒よりこそ起これ」と酒害を強調している。しかし、兼好は酒の弊害ばかり語ったのではない。同じ百七十五段の末尾では酒の徳についても語っている。「月の夜、雪の朝も、花の本にても、心のどかに物語して」飲む酒、「つれ〴〵なる日、思ひのほかに友の入り来て」飲む酒、「冬、狭き所にて、火にて物煎りなどして、隔てなきどち、差し向かひて」飲む酒、あるいは高貴な方の御簾の中から上品にさし出された酒や、かねがね近付きになりたかった人と酒のおかげでうちとけられるようになることなど、情緒を大切にして適度に飲む酒については兼好も肯定的であった。白楽天も飲酒の際の情趣を大切にしていたようだが、心の憂さを払うために時には大酒を飲んでいたのであり、この点兼好の趣味とは相容れない。

上に述べてきたように、白楽天は病気の苦しみから遁れるためにいろいろな試みをしていたようである。特徴的なのは心の持ち方によって病気の苦しみを忘れようとする姿勢であり、さらに精

神的な養生法の一環として仏道に帰依することを目標とし、病気を治してくれるのは仏教しかないと思っていたとも言える。また、酒を飲むことによって病気の苦しみを払おうとすることもあった。白楽天はさまざまな病気に悩まされているが、積極的に自分自身の健康管理を心がけ、いろいろな方法を試している。そのおかげで、彼は七十五歳まで長生きしたのではないだろうか。

五

周知のとおり『白氏文集』は平安時代から日本文学に大きな影響を与えている。数多くの文学作品でその受容が見られることは言うまでもないであろう。『徒然草』にも、多かれ少なかれ『白氏文集』の受容が見られる。兼好は恐らく頑健な身体ではなかった。その兼好が『白氏文集』を読むとき、一生病気に悩まされている白楽天の姿に一層の親近感を抱いたであろう。その親近感がさらに兼好の健康観にも影響を与えたのではないだろうか。

白楽天は病気の苦しみを緩和するためにさまざまな医術や薬を試して見るが、失敗におわり、究極の精神的養生法として仏教を信じるようになる。前にも述べたように、薬や医師に対しての不信が白楽天をしてあらためて仏道に興味を持たせたと思われる。また白楽天の詩には「老病」という言葉が頻繁に出てくるが、そのほとんどが白楽天自身の病気の経験を言うものであって、この「老病」を直すのには薬も医者も要らない、仏道しかないと述べることが多い。つまり仏道に薬や医者のかわりの役目を求めているのである。白楽天の仏道帰依は自らの肉体の苦しみを減ずることを大きな目的としていたものと考えられる。言い換えるならば、白楽天の仏教信仰は実利を求めてのものであり、病気や健康に対する見方も極めて現実的であり、具体的であったと理解してもよいであろう。

これに対して、兼好も白楽天同様自分自身の身体の健康管理に非常に注意を払っていた。それは『徒然草』における病や薬や医術に関しての記事からも窺われる。その一方で、薬や医師は最終的には人間を病気の苦しみから救うことはできないということをも自覚していたようである。「生老病死の移り来たること、又これ（四季）に過ぎたり。四季は猶定まれるつゐであり。死期はつゐでを待たず」と生老病死を四季に例えている第百五十五段、「閑かなる山の奥、無常の敵、きおひ来らざらむや。その死に臨めること、敵の陣に進めるに同じ」と「死」の不可避性について述べている第百三十七段の末尾、「人はたゞ、無常の身に迫りぬることをひしと心にかけて、束の間も忘るまじきなり」と無常迅速を自覚すべきことを述べている第四十九段などからも推察できるように、兼好は世の中は無常であり、人間には常に死が寄り添っているということに対して常に冷徹な認識を持っていた。そして、この無常の世を克服するためには、仏道に入ることが唯一の方法だと考えていたようである。人間は「はからざるに病を受」（四

九段）け、「病の重るも、住する暇なくして死期すでに近」（二四一段）付くことがしばしばある。「病を受けて死門に臨む時」（二四一段）になって、「所願一事も成」（二四一段）じていないことを後悔しても、何の甲斐もない。これは「老来りて、始て道を行ぜむと待つ」（四九段）人、「常住平生の念にならひて、生の中に多のことを成じて後、閑かに道を修し」（二四一段）ようとする人に対しての警告であるが、そこには生と死が隣り合わせである無常の世への透徹したまなざしが感じられる。『徒然草』のこれらの文章に示された死生観は思弁性が強く、白詩に見られる現実性を欠いているようにも感じられるのである。

白楽天は自分自身の病気をしばしば詩に詠じ、病気に対処するべく積極的に振舞った。兼好も白楽天同様健康に気を配っていたようだが、より現実に即した白楽天の病気観・健康観に比して、『徒然草』に示された老と死についての見方はいささか観念的、抽象的であるように思われる。しかし、病気への対処の仕方に微妙な違いはあるものの、二人とも健康には恵まれなかった。病弱であったことがむしろ白楽天に対する兼好の親近感を一層強め、二人を深く結び付け、人生に対してさまざまな類似した見方を生じさせたのではないかと想像されるのである。

注

（1）『徒然草』の本文は、正徹本を底本とした久保田淳校注の『方丈記・徒然草』（新日本古典文学大系三九　岩波書店　平成元年）を使用し、漢字・送り仮名の当て方などについては適宜表記を改めた場合がある。

（2）『学苑』（昭和女子大学　昭和四十九年一月）。

（3）『国文学の新考察』（至文堂　昭和十六年）。

（4）『徒然草必携』（学燈社　昭和五十六年）。

（5）山田俊雄「しほといふ文字は何れの偏にか侍らん」（『国語と国文学』昭和四十一年九月）。

（6）『白氏文集』の本文は、平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（同朋舎　平成元年）による。詩番号も『白氏文集歌詩索引』による。

（7）埋田重夫「白居易詠病詩の考察―詩人と題材を結ぶもの―」（『中国詩文論叢』第六集　昭和六十二年六月）。

（8）丹羽博之「白楽天の病状」。

（9）白楽天の官歴については、太田次男著『白楽天』（中国の詩人⑩　集英社　昭和五十八年一月）と、平岡武夫著『白居易』（中国詩人選⑰　筑摩書房　昭和五十二年十二月）と、堤留吉著『白楽天生活と文学』（敬文社　昭和三十二年四月）を参照した。

（10）注（7）に同じ。

（11）『白楽天研究』　花房英樹　（世界思想社　昭和四十六年）。

（12）白詩の訓読文については、佐久節『白楽天全詩集』全四巻（日本図書センター　昭和五十三年）と、岡村繁『白氏文集』三、四（新釈漢文大系99　明治書院　昭和六十三年）を参照した。

(13) 今井清　「白楽天の健康状態」。
(14) 下定雅弘　『白氏文集を読む』。
(15) 注 (13) に同じ。
(16) 注 (13) に同じ。
(17) 注 (7) に同じ。
(18) 注 (13) に同じ。

研究室受贈図書雑誌目録(四)

岡山大学国語研究（岡山大学教育学部国語研究会）一三
学芸国語国文学（東京学芸大学国語国文学会）三一
学習院大学国語国文学会誌（学習院大学国語国文学会）四二
香椎潟（福岡女子大学国文学会）四四
活水日文（活水学院日本文学会）三六、三七
活水論文集　日本文学科編（活水女子大学・短期大学）四二
金沢大学国語国文（金沢大学国語国文学会）二四
かほよとり（武庫川女子大学大学院文学研究科国語・国文学専攻院生研究会）七
上林暁研究（園田学園女子大学）七
岐阜女子大学紀要（岐阜女子大学）二八
岐阜大学国語国文学（岐阜大学教育学部国語国文学研究室）二六
九州大谷国文（九州大谷短期大学国語国文学会）二八
紀要（信州大学医療技術短期大学部）二四
紀要文学科（中央大学文学部）一七五、一七六
共同研究報告書（国文学研究資料館）平成一〇年度
京都語文（佛教大学国語国文学会）四
京都大学国文学論叢（京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室）二、三
京都府立大学学術報告　人文（京都府立大学）五〇
近畿大学日本語日本文学（近畿大学文芸学部）創刊号
金城学院大学大学院文学研究科論集（金城学院大学大学院文学研究科）五
金城国文（金城学院大学国文学会）七五
金蘭国文（金蘭短期大学国文研究室）三
群馬県立女子大学国文学研究（群馬県立女子大学国語国文学会）一九
言語科学論集（東北大学文学部言語科学専攻）三
言語学論叢（筑波大学一般・応用言語学研究室）一七
言語表現研究（兵庫教育大学言語表現学会）一五
言語文化（一橋大学語学研究室）三五
言語文化研究所要覧（安田女子大学言語文化研究所日本東洋研究部門）平成一〇年度
光華日本文学（光華女子大学日本文学会）七
高知大国文（高知大学国語国文学会）二九
甲南国文（甲南女子大学国文学会）四六